

ふくい・こうたろう 1969年、東京生まれ。文化庁の平成15年度買上優秀美術作品に日本画家としては最年少で選出。ニューヨークのチェルシー・アート・ミュージアムにて日本画家として初の個展を成功させるなど国内外で活躍している。

「絵を描くことは、
息をするように自然なこと」



1.「歩」(33.3×45.5cm)。2.「喜」(72.8×60.6cm)。「高島屋のお歳暮2018」のメインビジュアルとして制作された作品。3. 髪の毛よりも細い線を長く描けるように職人に特注した筆で描く。

躍動する フォームを日本画に

photo: Shigeharu Yoshihara
text: Yuko Yanai

Artist
Clip

no. 021

福井江太郎

Kotaro Fukui



父

親は洋画家、祖父と曾祖父が日本画家である福井江太郎氏は、子供の頃から息をするように筆をとってきた。それでも「本当に描きたいものはなんなのか」と葛藤した美大生時代に出会ったのが、今も氏の代表的なモチーフとなったいる駝鳥だ。

駝鳥が横一列に重なり連なっていく画には、予期せぬ線や動きが生まれ、植物の様にも見えてくる。「生き物としての駝鳥を描いているのではなく、形として表現しています。面白さが尽きません」

2005年からは「花」をテーマとしたシリーズも描き始めた。「BROKEN FLOWER」では、白い百合をあえて墨と岩焦茶の顔料で描き、「SILENT FLOWER」は金箔に天然群青を使って菖蒲を。「PASSION FLOWER」では岩絵具だけでなく赤いアクリル絵具も使って牡丹を描きました。前衛的な作風で知られる華道家の中川幸夫に刺激を受けたという氏の作品では、百合、菖蒲、牡丹という日本画では定番とされる

花々も新たなアプローチで表現されている。しかし「薔薇」を描くつもりはなかった。

「ぜひ薔薇を描いてほしい」というのは高島屋さんからのご提案でしたが、初めは躊躇しました。薔薇は一枚の花弁の中に濃淡がありません。油絵具ならぼかして表現できますが、墨はともかく岩絵具で描く日本画では面と線で表現しなくてはならないので困難なのです。薔薇は花卉が集まった立体的な構造をしているから、なおさらです」

それでも最終的にオフアートを引き受けたのは「自分の外側からやってきたテーマは、未知のエネルギーを生み出すきっかけにもなる」との思いがあったからだ。その結果、今年の夏に生まれたのが、金箔を背景に躍動感あふれる青い薔薇の作品だ(高島屋のお中元2018)のメインビジュアル。「12月の個展では、新たに赤い薔薇に挑戦しています。自分の中でも新しい試みとなるこのシリーズ。日本画ならではの薔薇を生み出していきたいと思っています」

Information

高島屋美術部創設110年記念・画業20年画集刊行記念
福井江太郎日本画展 - 薔薇に挑む -

日本橋店 本館 6階

12月19日(水)→25日(火)

画像刊行記念スペシャル対談
福井江太郎×

十五代酒井田柿右衛門

12月22日(土)午後3時より

京都店 6階

2019年1月16日(水)→22日(火)

大阪店 6階

1月30日(水)→2月5日(火)

横浜店 7階

2月13日(水)→19日(火)

新宿店 10階

2月27日(水)→3月11日(月)

上記各店美術画廊 ※いずれも最終日は午後4時閉場



撮影 橋本憲一